

今日からできること

今日からできる「水と緑の保全3ステップ」

グリーンインフラは、日々の暮らしの中で「水の扱い方」「緑とのつき合い方」を少し変えるだけでも、積み重なると大きな力になります。

ここでは、始めやすい3つのステップをご紹介します。

ステップ①

雨の日に「貯める・染み込ませる」を増やす

大雨が増えると、短時間に下水道や河川へ流れ込む水が増え、河川の氾濫や浸水等の水害のリスクが高まります。逆に、雨水が地面にしみこむほど地下水量が増え、湧水の保全にもつながります。

まずは、屋根に降った雨水の流れを観察してみてください。「どこに水が集まっているか」「すぐに流れてしまっていないか」を知るだけで、工夫の余地が見えてきます。可能な範囲で、雨水を貯める・庭や植栽で受け止めるなど、できることから始めてみましょう。

ステップ②

まちの「木陰」を増やす

緑は景観だけでなく、日陰や蒸散作用により暑さをやわらげる働きもあります。ワークショップでも「駅前広場など都市部で緑を増やし、ヒートアイランドを緩和してほしい」という意見がありました。

ご家庭では、落葉樹の活用や、バラダの鉢植え、窓辺の緑化など、小さな緑でも体感が変わります。花壇や植栽の手入れなど、短時間でも地域の活動に参加するのもおすすめです。

ステップ③

「学び」と「美化」で、自然との距離を近づける

「自然を守る」と聞くと構えてしまいがちですが、まずは知ること、関心を持つことが入口です。多摩川・野川、崖線緑地、深大寺・佐須地域など、調布市には学びの素材がたくさんあります。観察会やイベントのほか清掃活動など、「参加の理由がはっきりしている場」は、初めてでも入りやすいものです。

散歩のついでに参加する、家族と一緒に見学する。そんな軽い関わりが、地域の力を育てていきます。

やってみましょう！

身近でできることを選び、できる範囲で続けてみてください。小さな行動の積み重ねが、まち全体の変化につながります。

- 節水を意識します。
- 雨どいの詰まりを点検します
- 雨水貯留タンクや雨水の再利用を検討します
- 庭や敷地で雨を浸透させる工夫をします
- 近所の湧水や川を散歩し、変化に気づいたら共有します
- 多摩川・野川の清掃活動や美化活動に参加します
- 雑木林の管理技術を学ぶ講座・実習に参加します
- 自然観察会や「水辺の楽校」など学びの機会に参加します

調布市環境基本計画
ニュースレター一覧

- ①策定編 ②水と緑編 ③脱炭素編
- ④資源循環・生活環境編
- ⑤市民協働編

調布市環境基本計画についての詳しいことは、こちらの二次元コードからご覧ください



調布市環境基本計画 ニュースレター

② 水と緑編

調布市環境部環境政策課 作成

目次	[トピックス]	水と緑でつなぐ、グリーンインフラ	p.1
	[重点プロジェクト]	水と緑でつなぐ グリーンインフラプロジェクト	p.2
	[市民の意見の反映]	市民の意見から見えた「守りたい調布」と課題	p.3
	[今日からできること]	今日からできる「水と緑の保全3ステップ」	p.4

トピックス

水と緑でつなぐ、グリーンインフラ

水と緑は、景色だけではありません。
まちを守る「力」です。

調布市の魅力といえば、多摩川・野川の水辺、深大寺・佐須地域の緑、崖線(はげ)に支えられた湧水など、身近にある自然の豊かさです。散歩の途中で感じる心地よさはもちろん、暑さをやわらげたり、大雨のときに水を留めたり、生きもののすみかになったりと、自然にはさまざまな働きがあります。

この「自然の働き」を、まちづくりの中で活かしていこうという考え方が、グリーンインフラです。道路や建物だけでなく、水辺や緑地、農地なども含めて、まちの「基盤」として整えていく発想です。

新しい「調布市環境基本計画」では、重点プロジェクトの一つとして「水と緑でつなぐ グリーンインフラプロジェクト」を位置付けています。ねらいは、調布市の特徴であり財産でもある水と緑を育みながら、その機能を地域の魅力や住環境の向上にとどめず、防災・減災や暑さ対策にも活用し、持続可能なまちづくりにつなげることです。

市民意識調査では、「将来に残したい身近な自然」として「多摩川や野川の水辺空間」「深大寺界限」が特に多く挙げられました。さらに、ワークショップでは「調布駅周辺に緑を増やしたい」「駅前広場など都市部で緑化を進めてほしい」といった意見も出ています。つまり、調布市の水と緑は守りたい資源であると同時に、これからもっと育てたい資産でもあるのです。



深大寺・佐須地域の農の風景
里山の田畑も重要なグリーンインフラです。

グリーンインフラの4つの効果



重点プロジェクト

水と緑でつなぐ グリーンインフラプロジェクト

水と緑でつなぐグリーンインフラプロジェクトは、調布市の水辺・樹林地・農地などを「守る」だけでなく、つなげて活かし、暮らしの質と安全性を高める取組です。計画では、水と緑が多くある調布市の強みを生かし、日常の空間(道路・公園・公共施設など)でも効果を実感できるよう、施策を横断して進めます。

①水の保全・再生(雨水を地面に還す)

雨水利用や雨水浸透の促進により地下水を涵養し、湧水の保全・再生につなげます。雨が短時間に集中すると下水道や河川へ一気に流れ込みますが、浸透・貯留を増やすことで流出を抑え、豪雨時の負担を軽くします。市では、公共施設や道路での透水性舗装、雨水浸透ます・雨水貯留施設の導入促進、雨水浸透の重要性の普及啓発などを進めます。また、市内の湧水について、水量・水質・湧出状況などを継続的に調査し、変化を把握する基礎データを蓄積していきます。

②緑の保全・創出(崖線・社寺林・農地を守る)

国分寺崖線などに残る樹林地や社寺林、農地は景観や生きもののすみかだけでなく、暑さをやわらげる役割も担います。市民協働による管理や外来種駆除などの保全活動を推進し、また、雑木林の特性や管理技術を学ぶ講座・実習を通じた担い手の育成により、持続的な緑地保全の仕組みづくりを進めます。

③水辺と緑がおりなす風景を未来へ

長い年月をかけて水と緑、人の営みが育んできた里山風景や原風景を理解し、大切にしながら、市民の憩いの場として将来に残します。多摩川・野川などの水辺空間では、植生の保全・再生、美化活動や水質保全を進め、生きものに配慮した良好な水辺環境を確保します。

④暑さや豪雨への備え(気候変動への適応)

緑地や壁面緑化等のグリーンインフラを活用したヒートアイランド対策を進めるとともに、雨水利用と涵養を進め、雨水の流出抑制機能を高めます。

【取組の主な場所(例)】

- ・多摩川・野川などの水辺空間
- ・国分寺崖線(仙川崖線緑地、布田崖線 など)
- ・深大寺・佐須地域の里山
- ・公園、街路樹、公共施設

水と緑でつなぐ グリーンインフラプロジェクト

自然が持つ多様な機能を、地域の魅力向上、防災・減災、気候変動の適応に活用し、持続可能なまちを目指します。



計画本編 p.112に掲載しています

市民の意見の反映

市民の意見から見えた「守りたい調布」と課題

市民意識調査では、将来に残したい自然として「多摩川や野川の水辺空間」が78.0%、「深大寺界限」が72.4%と多く挙がりました。身近な水辺や里山風景が、調布市の魅力として大切にされていることが分かります。一方で、湧水、崖線の緑や田畑などの緑の減少への不安及び環境保全への課題も示され、その対策や参加しやすい保全活動の企画を求める意見がありました。

●ワークショップ等で出た主な意見

- ・多摩川・野川など水辺が近く、生物多様性が高い点は強み。さらに大切にしたい。
- ・深大寺の森や里山の風景に癒しを感じる。農地・田んぼを保全し、都市農業を支援してほしい。
- ・学校や公園で木陰づくりを進めてほしい。
- ・多摩川に自然な岸辺を整備してほしい。水質改善や安全な水環境の確保も重要。
- ・既存のみどりを保全し、市民が参加しやすい緑の保全活動や、グリーンカーテン・壁面緑化等の支援を広げてほしい。

●意見は計画にこう反映されました

- ①雨水利用・雨水浸透の促進、湧水の継続調査、水辺環境の保全・美化を強化します。
- ②市民協働による崖線樹林地の管理や外来種対策、担い手育成を進めます。
- ③里山風景や歴史・文化に根付いた原風景への理解を促進し、保全・活用につなげます。



ワークショップを開催しました

新しい「調布市環境基本計画」の策定にあたり、市民・学生の皆さんと意見交換するワークショップを実施しました。調布の「良いところ」を再確認するとともに、「もっと良くするには？」の具体的なアイデアを計画づくりに生かしています。

●実施概要(全3回)

- ・第1回 : 2025年6月15日(日)14:00 ~16:00 /市民21名参加
- ・第2回 : 2025年9月7日(日)14:00 ~16:00 /市民18名参加
- ・学生向け : 2025年9月13日(土)14:00 ~16:00 /学生5名オンライン参加

- ・資源循環では、食品ロス対策・分別の徹底に加え、コンポストや落ち葉堆肥を農につなぐなどの地域循環モデルの提案がありました。
- ・参加を広げる工夫として、短時間で参加できる体験型企画、夜間講座、SNS発信、学校との連携、若者からは「環境×音楽」「ポイント・ゲーム要素」「掲示板(電子化)で短く伝える」など、参加のハードルを下げるアイデアが出ました。

●主な結果(出された意見・アイデア)

- ・調布市の水辺や緑多摩川・野川、深大寺界限などは「まちの財産」で、満足度が高い一方、駅周辺など日常空間の緑化への期待が多くありました。
- ・脱炭素は「生活の改善」と結びつけることが重要で、断熱・省エネ、太陽光発電設備の導入、移動の工夫(自転車道・ミニバス等)が多く挙がりました。

ワークショップの様子

